

Market Flash

発表日: 2019年8月22日(木)

密かに近づくスイートスポット②

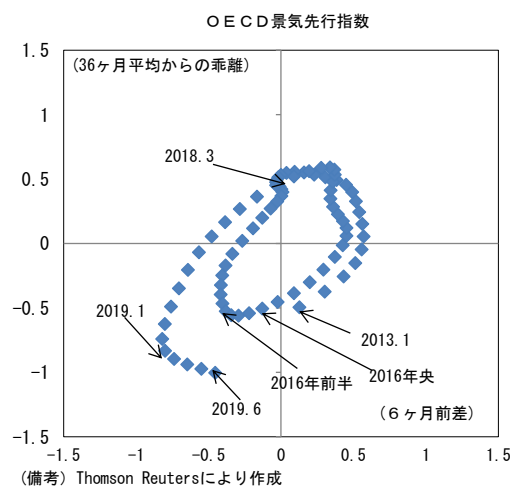
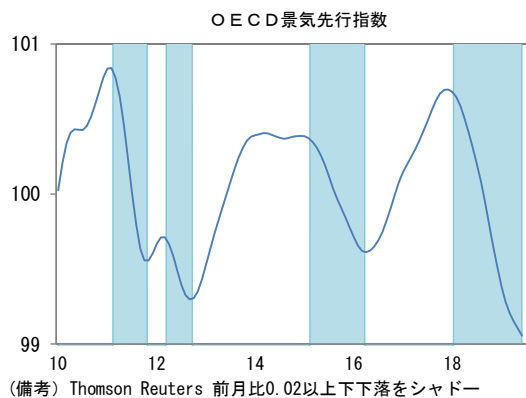
～2016年後半に株価は反転した～

第一生命経済研究所 調査研究本部 経済調査部
主任エコノミスト 藤代 宏一 (TEL: 03-5221-4523)

- ・日経平均は底堅い企業業績を背景に、先行き12ヶ月は23000近傍で推移しよう。
- ・USD/JPYは米利下げ観測が支配的となる下、先行き12ヶ月は105程度で推移しよう。
- ・日銀は現在のYCCを2020年末まで維持するだろう。
- ・FEDは予防的利下げを実施後、様子見に転じるだろう。

< #日本株 #OECD景気先行指数 #景気循環図 >

- ・昨日の当レポートでは、半導体市況に先行性を有すると考えられる①半導体製造装置の輸出（日本→世界）が下げ止まり、日本の鉱工業生産で②電子部品・デバイス工業の在庫が減少に転じたことを引き合いに、現在の世界経済を下押ししている半導体不況（シリコンサイクル）が最悪期を脱出しつつあるとの見方を示した。
- ・これは、より包括的な指標であるOECD景気先行指数（CLI）でも概ね同様のことが言える。現在のところCLIは17ヶ月連続で低下¹し、世界景気の風向きの悪さを象徴しているが、2019年入り後はその下落ペースが幾分緩やかになっている。CLIのトレンド（36ヶ月平均）からの乖離を縦軸、6ヶ月前比を横軸にとった景気循環図を作図すると、このカーブが機首をもたげつつあることがわかる。指数そのものが上昇に転じるには、もう少し時間がかかりそうだが、悪化ペースがこれまで以上にきつくなる可能性は低い。この指標は公表が遅く（およそ2ヶ月後）、先行指標としての使い勝手が悪い部分は否めない。しかしながら、循環図は好転のタイミングが近いことを示唆している。数ヶ月後には、もう少しはっきりとしたシグナルが点灯している可能性があるだろう。



¹ 0.02pt 以下の下落は横ばいとみなした

- ・日本株へのヒントを考えた場合、2016年前半から16年後半にかけての動きが参考になるだろう。今後、数ヶ月のうちに循環図上のC L Iが上向きのカーブを描くとした場合、当時の状況が再現される可能性がある。日本株は2016年前半に急落した後、年央にボトムをつけ、後半に上昇した。

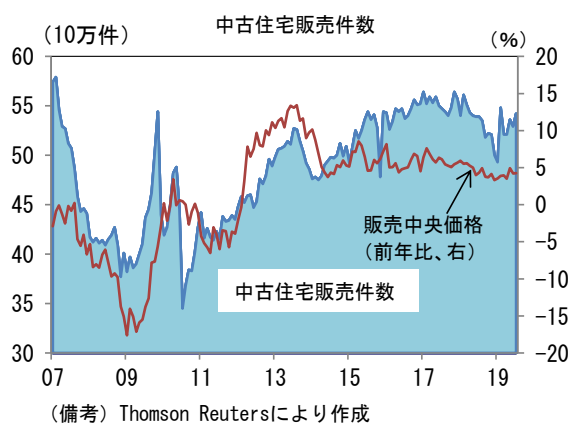


【株式市場・アジアオセアニア経済指標】

- ・日本株は欧米株高に追随して高寄り後、上げ幅縮小（10：30）。

【欧米経済指標】

- ・ 7月米中古住宅販売件数は前月比+2.5%、542万件と市場予想に概ね一致。2016年以降、水準は500-550万件レベルで安定している。



【海外株式市場・外国為替相場・債券市場他】

- ・前日の米国株は上昇。小売大手の決算を好感した後、さほどハト派寄りではないFOMC議事要旨を受けて上げ幅縮小。WTI原油は55.65ドル（▲0.45ドル）。
- ・前日のG10通貨はFOMC議事要旨を受けてUSDが小幅に上昇したものの、一日を通してみれば小動き。USD/JPYは106後半へと水準を切り上げ、EUR/USDは1.10を割り込んだ。
- ・前日の米10年金利は1.589%（+3.4bp）で引け。FOMC議事要旨を受けカーブはベアフラット。2年金利は1.573%へと6.1bp上昇。欧州債市場（10年）はドイツ（▲0.673%、+1.9bp）、フランス、スペインが金利上昇。イタリアが小幅に金利低下。ドイツ30年債入札は▲0.11%と初のマイナス。

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所調査研究本部経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命保険ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。